

いじめと非行について

鳥取県鳥取大学附属中学校 1年 ^{かわはら}河原 ^{ももか}桃香



小学校のころ、クラスメイトにいじめられている子がいた。なぜかは分からないけれど、その子（以下「Nさん」）は嫌われていた。みんな「うざい」とか「うるさい」とか言っているけれど実際に話しかけてみれば、別にそうだと感じなかった。嫌っているのはクラスの中でもリーダー的存在の人達で、その人達に流されて私達もすこしずつNさんから離れていった。Nさんは、積極的だった。ほとんどリーダー達が回している学級会の中で決まろうとした結論に一人「異議あり」と立ち向かっていける強い意志を持った人だった。そんな人だったからこそリーダー達に嫌われていったのではないかと思う。孤立したNさんはいじめを受けるようになった。いじめといっても、直接殴るとか、蹴るとかではなくて、仲間外れにする、裏で（時には直接）悪口をいうといったものだ。殴るのももちろんいいわけでないが、よっぽどそっちの方がタチが悪かった。私はNさんとあまり関わる機会がなく、いじめについて意識せずに過ごしていた。

ある日、体育の授業でマラソンをした。その日は気温が高く、雲一つ見当たらない青空からは日光がこれでもかと降り注いでいて、校庭はサウナのような感じだった。だから、頭があまり回らず、目の前のNさんに気付けなかった。早くマラソンを終わらせてしまおうと加速した私は石につまずき、目の前を走っていた人ごと巻き込んで前に倒れた。一瞬何が起きたのか分からず、私はすぐに動けないでいた。突然、自分の体の下から泣き声が聞こえ、私はあわてて起き上がった。私が押し倒した人はNさんだった。私は動揺して、ひたすら謝り続けた。Nさんはひざから血を流して、痛そうに手で押さえていた。一方で私の体には傷一つなかった。Nさんは駆けつけた先生と保健室に向かった。私はNさんの心配よりも先に、私もいじめられるのではないかという恐怖で頭が一杯になった。人に怪我をさせておいて、とても自分勝手だと思う。そんな自分勝手な私をNさんは許してくれた。

次の日、私はおびえながら学校に登校した。昨日の出来事で誰かに悪口を言われるのではないかと思わず体がぶるりと震えた。けれど、予想と違い、私に悪口を言う人はいなかった。それどころか、「よくやった。」と言う人まで現れたのだ。さすがにおかしいと感じた。みんながさげていることは知っていたけれどここまで嫌われているとは思っていなかった。その日からNさんとその周りの人達の様子を注意深く観察してみれば、いじめが起きていることは明白だった。なぜ気づけなかったのだろう。それまで私は、いじめは加害者といじめ

を笑って見ている人のみが被害者を傷付けていると考えていた。けれど、いじめに気づかなかった自分にも非があるのではないかと思い始めた。いじめの存在に気づいてからも、私は行動を変えられなかった。私がかばえば私が代わりにいじめられそうで怖かった。私はNさんに自分からは話しかけず、クラスメイトが陰口を言うところに遭遇しても見て見ぬふりをした。そのまま何もできずに小学校を卒業した。

中学校に入学してしばらくしたころ、私は先生に呼び出されて、あるお願いをされた。学校で以前に行ったアンケートである人が男子にさげられているという意見がたくさんあったため、席が近い私に注意してもらいたいということだった。先生に頼まれた日から私は、気になったことは報告し、問題は解決した。私は直接ではなかったが、いじめから人を救う手助けができてうれしかった。

ある日、道徳の授業でいじめについて学習した。いじめを川で溺れている人に例えていた。自分も直接助けに飛び込めば溺れてしまうかもしれないけど、大人に助けを求めたり、声をかけたりするだけでも問題解決につながるとあった。この話を見て、私は直接かばう以外にも助ける方法があることを知った。

夏休みに入り、ルールが書かれた紙が配られた。そこには小学校の時と変わらず、少年非行防止のために「ゲームセンターやカードゲーム店への出入りは禁止。」と書いてあった。内容は同じだけれどいじめを知る前の私とはずいぶんと見方が変わっていた。以前は非行をする人は頭のおかしい人で自分は関係ないと思っていた。でも、今は非行に走る少年にも事情があるのかも知れないと考えるようになった。いじめを受けて、現実から逃げたくなって、非行をしたのかもしれない。それは、決して人事ではなくて、誰にでも起こりうることだと思う。だから、私はいじめが起きないように、行動に意識を向けるようにした。

いじめが発生してしまったら、直接助けられなくても自分には関係ないと放っておかないように心に決めた。一人でもそういった心がけをすることで、少年非行の減少にもきっとつながると私は信じている。